

賢者の贈り物

『賢者の贈り物』は、オー・ヘンリー¹による短編小説である。ある夫婦は貧しいながらも幸せに暮らしていた。男は妻に櫛を買おうと自分の大切にしていた懐中時計を質にいれ、女は夫の懐中時計の鎖を買おうと自分の美しい髪を売ったというクリスマスの出来事が描かれている。この場を借りて日本にもあった（と思われる）美しい行き違いをご紹介します。

ある夫婦は高齢だが幸せに暮らしていた。絵画に造詣の深い妻はある画家の絵画を購入したいと考え、夫も賛成し、二人はその絵を手にいれた。画家は親切な男で、折角自分の絵を買ってくれたのだから、更に版画も額装してお渡ししましょうと申し出たため、夫婦は喜んで待った。しかし、画家は忙しさに紛れて、約束の絵を送ることができずに1年半が過ぎてしまった。読者のご想像に違わず、結城哲彦さんご夫妻のお話である。

哲彦さんは、残念ながら2019年6月18日にお亡くなりになった。そして、誰が知らせたわけでもないのに、画家から6月27日にこの版画が送られてきたのである。あたかも、残された奥様を奥様の大好きだった画家の版画で慰めるためであるかの様に。

しかし、奥様の美代さんは、哲彦さんのご葬儀の翌日6月24日突然お亡くなりになった。あたかも、夫が一人では寂しいだろうと慮ったかの様に。

「84歳の後輩」結城哲彦さん、美代さんとともに、安らかにお眠りください。

(小川明子)

¹ O.Henry (1862-1910)。小説「賢者の贈り物」の原題は、The Gift of the Magi。